024926-000-1

特67-934

信濃歴史談 第2編

清水 毛竿/編

M35

ADC-2220

宮內省圖書寮

信濃歷史談

第貳編

明治五年・內交・圖書寮

碧梅

杜門不復出靜觀時景
移古松高勁節細草叢幽
安石淺泉常留昔林深苔不
晞畏卬後園裡可以療吾
饑 閑居雜詠

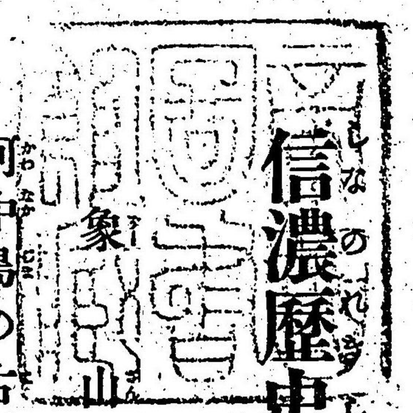
泉山

帝國圖書館 IMPERIAL LIBRARY

信濃歴史談

第二編

小林雪庵校
清水毛竿編
林探樂畫



河中島の古戰場を、東え一里許りはなれて、松代と申す城市があります。眞田氏代々、十萬石拜領の城趾で、前わ、千曲川をへだて、飯綱山を相對し、後わ、山また山と連り、屏風を立てならべたよーに、誠に要害の

よい地であります。

今から大凡九十年前、象山佐久間先生わ、千曲川の清き流を産湯に、此地で生れました。父わ一學と申し、文武の達人で、殊に易學にくわしかったそーです。

檀わ、ふたばより芳ばしく、先生三歳の時に、乳母に抱かれて、ある寺え參詣しましたが、門前の建石を見て、しきりに指の先きで、文字をかくまねをしておりました。乳母が、邸えかえりまして、その事を物語ります

と、父の一學わ、心ある人でしたから、すぐに紙と筆とを、先生にやりました。先生わ、滿面に笑を含み、紙にむかい、禁の一字をかきました

七八歳で、能く書物を讀み、文字をかきましたが、何にせよ、身の丈わ、世の常の十二三歳の、子供より高く、髪わ、蓬のよーに、ふりみだし、衣服や手足の、汚るゝを、更に心にかけず、共に遊ぶ友達もなく、口をもきかず、唯にこ〳〵と、笑つておりましたから

果わ、近所の者まで、佐久間の馬鹿者と、嘲り笑およーになりました

ある日、先生わ、父の用事で。市外の西條とゆー所まで、參りましたが、いたづらざかりの、子供が五六人、道のはたに、遊んでおり、其中の一人が、早くも先生に目をつけて。「おい、太郎も次郎も見ねー。ありやー、佐久間のばか者ぢやーねーか。」「そーだ。いやにまた、すましやーがるな。馬鹿のくせに。」「一体、士のがきゃー。氣にくわねー。刀な

んかさしゃーがって。さきやー、一人だから、さんざ、からかつて、やろーぢやねーか。」「おもしろい、おもしろい。」と。口々にいゝながら、先生の方え、やつてきましたが、先生わ、平氣で、其中をわつて、通ろーとすると、一人が「おい、口わねーか、馬鹿。その長い面わ何だ。人間の氣に、なりやーがつて」。先生わ、何を云われても、更に氣にかけず、ゆーゆーと、通りすぎると、惡童どもわいよ〳〵圖にのり、あとからぞろ〳〵、つ

いてまいりまして、惡口をゆーやら、砂をなげるやら、それはく、亂暴をきわめました。先生わ、心の中でわ、餘り快くわありませぬが、斯る無智の惡童を、相手にするも、益なきこと、其上、父の大切の御用を。承つておることですから、じつと堪忍しております。と、中にも、年かさの餓鬼大將わ、いきなり棒をふり上げて、無法にも、先生をうちました。

打たれて先生わ、いきなり足をあげて、道

端の溝の中え、其子をけこんで、しまいました。惡童どもわ、之を見て、「それかゝれ。たゝんでしまえ。」と、四方から、うつてかゝりました。先生わ、ものともせず、うちすえねぢふせ、暫くのうちに、殘らず追いちらしてしまいました。溝の中えおちた子も、此時漸く土手の上にはい出で、一目散に逃げだす所を、先生すかさず、とびかゝり、そこえひきずえ、刀の下緒をとき、柳の木に、しばりつけて、よしすによつてわ、一刀に切りすて

よーとしましたが、庄屋はじめ、數多の人々かけ來り、ひたすら、佗び入りましたから、後來をきつと戒しめ、一命だけわ、助けてやりました、

先生は、此頃から、よく詩を作り、十二三歳のときにわ刀槍の術は勿論、砲術、筭術駆法、何一つ出來ぬものわなく、泅ぎの術さえ、餘程上手であつたとゆーことです、

ある夏の頃、母わ、持病のため、かりそめの床につきましたが、日一日と病はつのるば

かりで、醫藥わ更に其効しがありません、剰え、打つゞく梅雨に、健な身体さえ、よき心持わせぬものを、病人の苦痛わ、一層だろーと、元來孝心の先生ですから、夜晝看病して心を勞して居りましたが、不圖、善光寺大門町に、名藥のある事を、聞きこみましたから、取るものもとりあえず、直にそれえ志して出立しました、行くさきわ、名におーー千曲川、連日の雨に、水かさ、日頃に百倍し、蕩々として、さながら海の様でありました、

船宿えまいりまして、「おい、船頭水が少しわふえたかな、「丁度、四五人の船頭が、より集つて、酒をのんでいましたが「左様、まー一寸こんな塩梅で、」「酒代わ遣すが、早く出してもらいたいものだ、急用だから、」「あなた御冗談をおっしやって、みてもわかりそーなもんで、この水じやー、」「船わ出せんと申すのか。」「左様で御ざいます、どーぞお助けくだすって、」あとへかえると思いのほか、先生わ、直に丸裸になり、刀や衣類を頭にのせ

、さんぶと許り川の中えとびこみ、山の如き濁浪を物ともせず、眞一文字に流して、やすやすと向ふの岸におよぎつき、善光寺に行き、薬を買つて歸りました、母わ、おーかたこの靈薬と、先生の一心とで、病もまもなくなおったでしよー、

先生文を講じ武を練りながら、また大に膽力の修養に心がけ、名山大川をさぐり、大に得るところがあつたそーですが、こゝに松代の北に、戸隱山とゆー、一名山がありまして

まだ十分、其奥をきわめた人のないとゆー程の深山で、紅葉の名所であります、

ある年の秋、先生わ、友達とこゝに、終日紅葉をさぐりましたが、いざ此上わ、夜の景色も亦一入ならんと、互に二人わ路を分ちて、山の奥えふみこむことになりました、先生わ、友達にわかれ、峰を越し、谷をわたり、次第に奥えたどってまいりましたが、夜わだんだんと、ふけわたり、尾上をわたる松の風にたぐえて、おり〳〵なくあやしき鳥の聲の

外わ、只谷川の音のきこゆるばかり、しばし、傍の石に腰打ちかけて、空うそぶいておりますと、はるかあなたに、落葉をふみならして、此方えくる足音がするに心付き、息をころして視て居ますと、一陣の風に落葉をとばして、まもなく現れ出でましたわ、熊か猪かわ分らねど、小牛の様な猛獸、七八頭人のおるにも心付かず、まっしぐらに先生の前をかけぬけました。先生は、いと興ある事に心得あとよりおいすがりて、最後の一頭を、し

たゝかにつきましたが、あやめもわかぬ深夜といゝ、殊に足場も惡るかつたゝめ、遂に打ちもらしてしまいました、先生わ、不本意ながら、峰に上り、火をたき、詩など打吟じて友達をまちあかして居りましたが、友達の火を認めて、尋ねて參りました時は、先生わ火のそばに、白川夜船でねておりましたそーで、その平氣にわ、友達もおどろいたそーです。

先生わ、十七の年、父の許を得て、文武両

道の修業にと、奥羽諸國を遊歴しました。まづ碓氷嶺を打こし、高崎、水戸、土浦の諸藩を經て、暫時江戸に滯在し、野州をすぎて、會津、仙台の城下より、盛岡、青森を經て、庄内えとかゝりました、至るところ、英雄豪傑と武藝を研磨し、慷慨愛國の輩と時世を論議し、廻り廻りて、終に越後の國、新發田まで參りました、此地には瀧尾某とよぶ、劍道の達人がございました、もとわ西國の浪人でありましたが、新發田藩の、お抱えとなり

ましてから、武勇の譽れ、四方に高く、門下も數多出來ましたが、性來自慢心強く、人も人とも、思ひませぬところから、かげでも、惡くゆー人も多くありました、

先生わ、兼ねて瀧尾の評判を、きいて居ましたから、我が劍道の師と仰がん人わ、此の人ならめと、ふかく心に慕ひ、先づ旅宿について、からだを休め、明日の事など、何に呉とかんがえておりますと、宿の下女が、それを出ましして、「旦那わ、松代藩の佐久間先生で

いらつしやいますか。只今當藩劍道の御指南番、瀧尾先生がいらつしやいまして、是非、先生に、御意得たくと申して、扣えておいでですが、如何取計いましよーか。」先生わ、瀧尾先生ときいて、大におどろき、直にお出迎にまかり出で、上座え御案内申上げ、偖、丁寧に頭をさげ、「始めて御意を得ます。某わ、信州松代藩士佐久間啓之助と申す者。先生の、御高名を承り、わざわざ、これまで參り、早速御伺い申さんと、思いましたに、お尋ねに

預り、恐縮至極」と申し陳べますと、瀧尾も先生の劍道に勝れ、文學に長じたることを聞き及んでおりますから、これもいと丁寧に、挨拶がありました、偖いろ〳〵文武のお話がありましたが、先生わ、自ら卑下して、先を十分敬い、決して高ぶる樣な、氣色わ見えませぬから、瀧尾わ、我心にひきくらべ、何に聞きしに劣る佐久間啓之助、何程の事かあらんと、十二分に輕蔑の心を出しましたが色にもみせず、其夜は引きとりました。

翌日、瀧尾わ、門弟一同を集め。「今回兼ねて、諸君もきゝ及ぶ、信州松代藩の豪傑佐久間先生、當地に來遊せられたるにつき、先方の望みにまかせ、明日君侯の御上覽を乞い晴れの試合を催すべければ、諸君にも、御倍覺の榮を得て、一生の面目とするか宜しい。」と、如何にも自分がもし、勝ちでもした樣に、鼻高々と申しわたし、さて其の事を願出でますと、君侯も、至極おもしろいことにおぼしめされ、至急にとの御沙汰を蒙りまし

た、

先生わ、一方ならず迷惑に思はれて、一先づわ、御辞退を申上げましたが、もー此場となり、卑怯の擧動あつてわ、君父の名折れ、且つわ、刀の手前も面目なしと、潔く承知の旨、お請に及びました。

既に刻限にもなりますれば、試合の場所に わ、君侯を始め、一家中、星の如くに居流れ、先生わ、數多の門弟を引きつれ、先生とむきあいに、座につきました。双方少しく進み

出で、互に一禮して立上り、暫しにらみ合って居ましたが、瀧尾の打込む一刀を、先生わすばやく、体をかわして、空をうたせ、手もとの少し亂るゝところにつけこみ、難なく竹刀をうちおとしました、瀧尾わ、大に面目を失ひ、このたびわ、槍をもって立會わんと、再び試合をしましたが、先生の鋒、電の如く、瀧尾、進退度を失ひ、散々につきふせられ、後ろざまにどつと倒れました、此の体を御覽になつて君侯にわ、頗る御不興の体で、其まゝ

奥えおはいりになつてしまいました。

次の日、先生は、新潟をさして、出かけましたが、もとより知らぬ野邊の道、黄昏ごろ、物淋し松原を通りかゝりました。

すると物かげから、現れ出でたる大の男、手に白刀をひらめかし、會釋もなく、只一打ちに打つてかゝりました。先生わ、其手をきつとおさえ、よくよくすかし見れば、まごーかたなき、瀧尾の門人でありましたから、獨り心にうなづきながら、傍の立木に、しばり

つけたまゝ、ゆーくとして。新潟え立去りました。

先生わ、これから、次第にえめぐりて、加賀の金澤まで、まいりましたが、出立してから、日數もつもりつもって、半年以上にもなりましたから、今わ、これまでと、一先づ、郷里え歸りました。

當時、松代の藩主わ、有名な白河樂翁公の御次男で、眞田幸貫公と申し、天資英明なお方で。先生の才を愛し、ぬきあげて、近侍と

なさいました。これ實に先生の、十八歳の時のことです。先生わ、深く、其恩に感じて、只管忠勤をつくされました。

或年の事。幸貫公が江戸にお出になる時に先生わ、お供を命ぜられました、丁度、此時に、先生の父君わ、病氣で、命までも危いほどでした、孝心の深い先生わ、お供をした上江戸に行きたいは、山々あるけれども、父の病氣のために、お供御免を願いて。「君の御用を勤める日は長いけれども、重病の父に

つかえる日わ、短かい、君の命に從わぬのわ悲しいけれども、子としてわ、如何にしても、重病の父を見捨てる事が出來ぬ、どーか、此度だけわ、御供をお許し下すつて父の看病をさせて下さい、」と申し出ました、此の氣の毒な願いでわ、幸貫公も、お許しになりましたが、其時の藩の掟で、如何な事があつても、君の命に從わぬものわ、閉門とゆー罰をうけるので、先生も閉門を命ぜられました、其内に、先生の父君も死なれて、閉門も許

され、先生わ涙にかきくれながら、葬式をすませ、供養をなし、後を深く吊いましたから一藩中のものわ、皆先生の、孝行を賞めました。

これから、常に藩主の傍に居て、先生わ、暇さへあれば、書をよみ、武藝を學びました、天保四年とゆー年に、先生わ、二十三歳で、つら〳〵思ひますに、一生片田舎に朽ちはつるのも、殘念である、是非、江戸に行つて勉強し、良き教師について教えをうけ、又、よ

き友だちとも交つて、えらい人になろーと、其旨を幸貫公に願ひますと、早速御許しになりました上に、澤山の路銀や、學資さえ下さつて、なお「如何なる事にても、必ずやりとげるとゆー決心で、勉強せよ、」と仰せられましたから、先生わ、面目身にあまり、大喜びによろこび、天にも登る心地で、江戸に出る事になりました、

先生の母君わ、農家の生れで、文字などわ一字も讀まれなかつたそーですが、なか〳〵

賢夫人で、斯人ありて斯子ありと、近所の評判になりました位です、母わ、いざ先生が旅立とゆーので、先生を町外れまで見送り、松の木蔭でしばしと呼びとめ、懐中より錦の小袋をとり出し、恭しく之を先生の懐に納め、「これわいろ〳〵の護符と父の戒名なるぞ、今より之を汝の身につけよ、江戸につかば、行を慎んで、一心に學問し、決して〳〵殿様の御恩に背くよーな事をしてわならぬぞ、」と、云われました。先生わ感じ入りて、涙をながし、「

私もきっと、錦をきて、家にかえります、母上もそれまでわ、お達者で、」と、別れをつげて、江戸に出かけました。

先生わ、五十八里の道中を、無事に江戸について、まず林述齋とゆー、其頃の有名な學者について、學問しました、先生わ、國に居られた頃から、學問にわ熱心であつたから、教えられる事わ、多くわ、先生のもー知つている事ばかりでした、そこで、先生わ、間もなく、百人もある弟子をこえて、一番弟子と

なりました、先生わ、もー林の家でわ、教えらるゝ事もないとゆーので、此度わ、其頃日本一の學者だといわれた佐藤一齊先生について、學問に勉強しました。しかし、佐藤先生の講義わ、先生の考と、ちごーところが多かったから、先生わ、「われわ、佐藤先生に、文章は教わるが、講義わならわぬ」と云つておったといゝます。

先生わ、有用な學問に、勉強しながら。また。詩、歌、琴なども、名ある人について、

習いました。殊に理科の學わ、最も熱心に、學ばれたとゆーことです。

先生が、江戸に學問していました、四年の間とゆーものわ、一所懸命に、勉強ばかりしていて、藩主から、いたゞいた學資も、書物を買ーてつかってしまい、おり〳〵、金のないために、苦勞をしたのてす。國にいた先生の母君わ、また、先生が、こまっているだろーと、心配して、どーか我子を立派な學者にしたいと、ゆーので、糸を買つてわ、布を織

り、其布を、商人に賣つてわ、金を先生におくったそーです。後に。先生わ、此頃のこまつた事を、ひとに話して、「わたしも、ずいぶん、こまって、寒中の、ごく寒い時分にも、火鉢に火があるではなし、足袋一足買ーこともできず、足が冷たいから、着物の裾につんで、机に向って、書物を讀んだが、しかし、母が、わたしのために、苦勞してくれた事を思えば、この位な事わ、なんでもなえです。」と、言ったそーです。で、先生わ、もー

何一つ、できぬことわ、ないので、藩主わ、先生に、國にかえるよーにと、仰せわたされました、

先生わ、母に約束したとーりに、學問上達して錦をかざって、故郷松代えかえりました。そーして、月次講釋助役とゆー、役になりました。先生の母わ、先生のこの出世を見て、どんなによろこばれたでしよー。

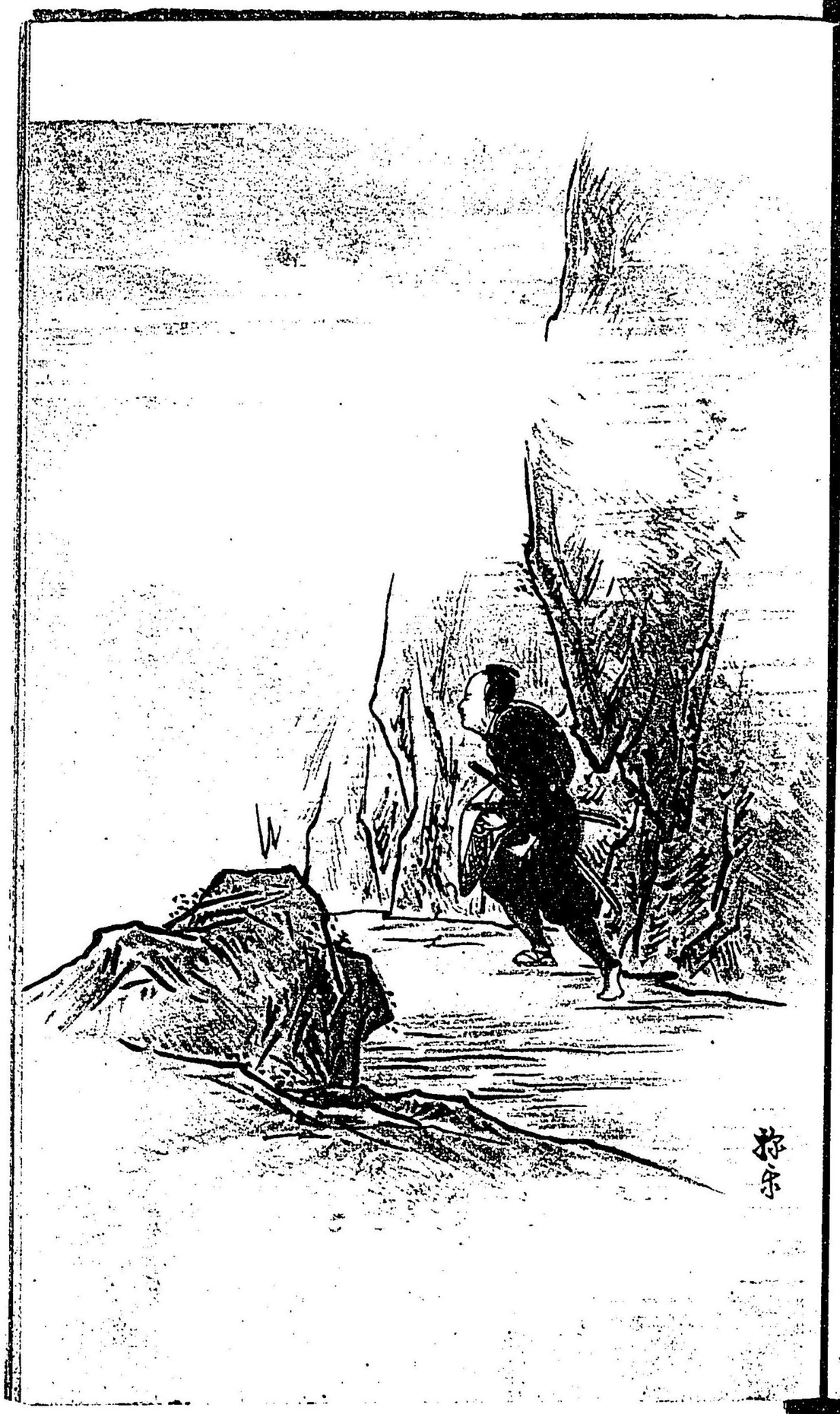
三年ばかり、先生わ、松代で、生徒を教えていましたが、まだ〳〵學問が足らぬと、ゆ

ーので、再び、藩主に願つて、江戸に出ました。今の神田田町の邊に、學校をたてゝ、生徒を敎えながら、先生わ、佐藤一齊、梁川星巖、藤田東湖、大槻磐溪、などゆー、名ある學者と交つて、たいへんに、自分の知識を增しました、

今でこそ、中學校の生徒ぐらいで、じきに英語の一つや二つわ、つかえますが、この頃わ、我國でも、外國語の出來た、學者わ、めったになかったのです、それを、先生わ、

「どーしても、これからわ、外國のよーすを、よく知らなくてわ、外國との交際が出來ぬ。外國のよーすを、知るにわ、外國語を、知らなくてわならぬ。」と、ゆーので、和蘭語を一心に學びました。これわ、先生の三十四五歳の時のことだと、言います。

天保十二年に、藩主幸貫公わ、老中とゆー役になりました。老中わ、將軍をたすけて天下の政をする役です。そこで先生わ、大西洋の書物を、讀んでわ、外



信濃歴史談

國のよーすを知り、外國とくらべて、我國のまけていることなと、いろ〳〵と藩主に申しあげました。此の時に、先生の書いた、海防策とゆーものが、なか〳〵えらいもので、今になつても、これをよむと、先生の見識の、高かつたことが、わかります。しかし、惜しいことにわ、先生の意見わ、用いられませんでした、

先生わ江戸に居て、藩主をたすけ。外國と交際して、我國を盛にすることを考えて、一

心になって、いろ〳〵藩主にすゝめて、おりました時分に、松代から飛脚が來まして、先生の母が、大病で、命もむづかしいから、早く先生に、歸國せよ、と、ゆーことを、知らせました。先生の驚きわ、どんなでしたろー。今、日本國の大事を、考えていながらも、一人ぎりの、母の病氣を、かまわぬわけにわまいりません。先生わ、急に支度をして、一日の中に、碓氷嶺まで、きましたが、夜にわなり、殆に高山で、霧が深くて、道もわから

ず。大に難儀をし、夜通し歩行いて、よーよ十、夜の明け方に、小諸につきました。すると、また、雨が降り出し、風さえ強く吹きだしまして、大暴風雨になりました、が、先生わ、雨風をおかして、五十八里の道を、わずかに二日で、家にかえりました。幸にも、先生の母わ、病氣がなおったから、先生わ、よろこび泣きに泣きました。ほんとにうれしかったっしよー。そこで先生わ、今まで、母のそばに、いたことがすくなくて、孝養のて

きなかったのを、ふかくわびて、しばらく、江戸えゆくことを、みあわせて、一心に母を養ひました。後に先生、この時のことを人に話して、「一生のうちに、この時ほど、たのしかったことわない。母のそばで、孝養するたのしみわ、將軍になったって、大名になったって、得られるものでわない。」と、言ったそーです。

弘化二年に、先生わ、また江戸え出ました、一心に和蘭語を、學びましたから、ますま

す上達して、遂に英語、佛蘭西語、なお進んで、羅てん語迄、學びました。こんなに多くの國語を學ぶのに、先生わ、其時の洋學者に、きゝたゞしましたが、多くわ、自分で、字書をひいて、勉強したのです。教師もなく、書物もなく、しかも、洋學をやると、世間から、國賊のよーに、いわれた時分に、先生わ、洋學を學んで、毎夜十二時を、きかずに眠ったことわ、なかったそうです、この通り、外國語もできて、外國のよーすも、すっかり

わかったから、先生の見識の、高くひろかったことわ、實にたいしたものでした。

それから、先生わ、天下のために、いろいろ、うまい事を考えましたが、幕府の役人に叱られて、九年間も、松代におしこめられました。

しかし其中に、世の中のよーすが、すっかりかわって、あめりかの軍艦が、浦賀に來てから、先生わ、將軍德川家茂に、召し出されて、京都え出ました、これから、いよ〳〵先

生の意見を、のばす事ができました。

元治元年の七月十日に、先生わ、西洋馬具をつけた、白馬に騎り、大事な書面を、懐に入れて、山階宮に行こーと、京都三條木屋町を、通りました時に、賊五六人、道傍の物蔭から、跳り出して、先生に、後からきりつけました。先生わ、馬に一鞭あてゝ、走りだそーとしましたのを、馬丁わ、馬が何かに驚いて、騒ぐと思って、馬の口をつかまえてしまいました。其ひまに、賊わ、先生をきりまして

先生わ、遂に死んでしまわれました。これわ今から、「明治卅五年」、三十八年前のことで、先生の五十四歳の時です。實に惜しいことをしました。

幼少の時に、馬鹿だ〳〵と、罵られた小僧が、學問を勉強して、陪臣でありながら、將軍に召され、遂に芳ばしい、名をのこして、賊のために、此世を終りました。わたくしわ、先生が、もー二三年も生きておられたなら日本の文明は、七八年も、早かったろーと

思ひます。

明治二十三年、朝廷わ、先生の功を賞して正四位を贈られました。

この山高く水清き、信濃の看官の中にわ、今にまた、先生のよーな、大豪傑が、でるだろーとわたくしも、喜んでおります。

めでたし〳〵

信濃歴史談第二編終

、思ひます。

明治二十三年、朝廷わ、先生の功を賞して正四位を贈られました。

この山高く水清き、信濃の看官の中にわ、今にまた、先生のよーな、大豪傑が、でるだろーとわたくしも、喜んでおります。

めでたしく

信濃歴史談第二編終

明治三十九年三月廿二日印刷
明治三十九年三月廿五日發行

定價金拾貳錢

編者　神村五百六拾四番地　小林照三郎

發行兼印刷者　長野市横町四拾壹番地　松木保三郎

印刷處　松木保三堂

復製不許

信濃歴史談

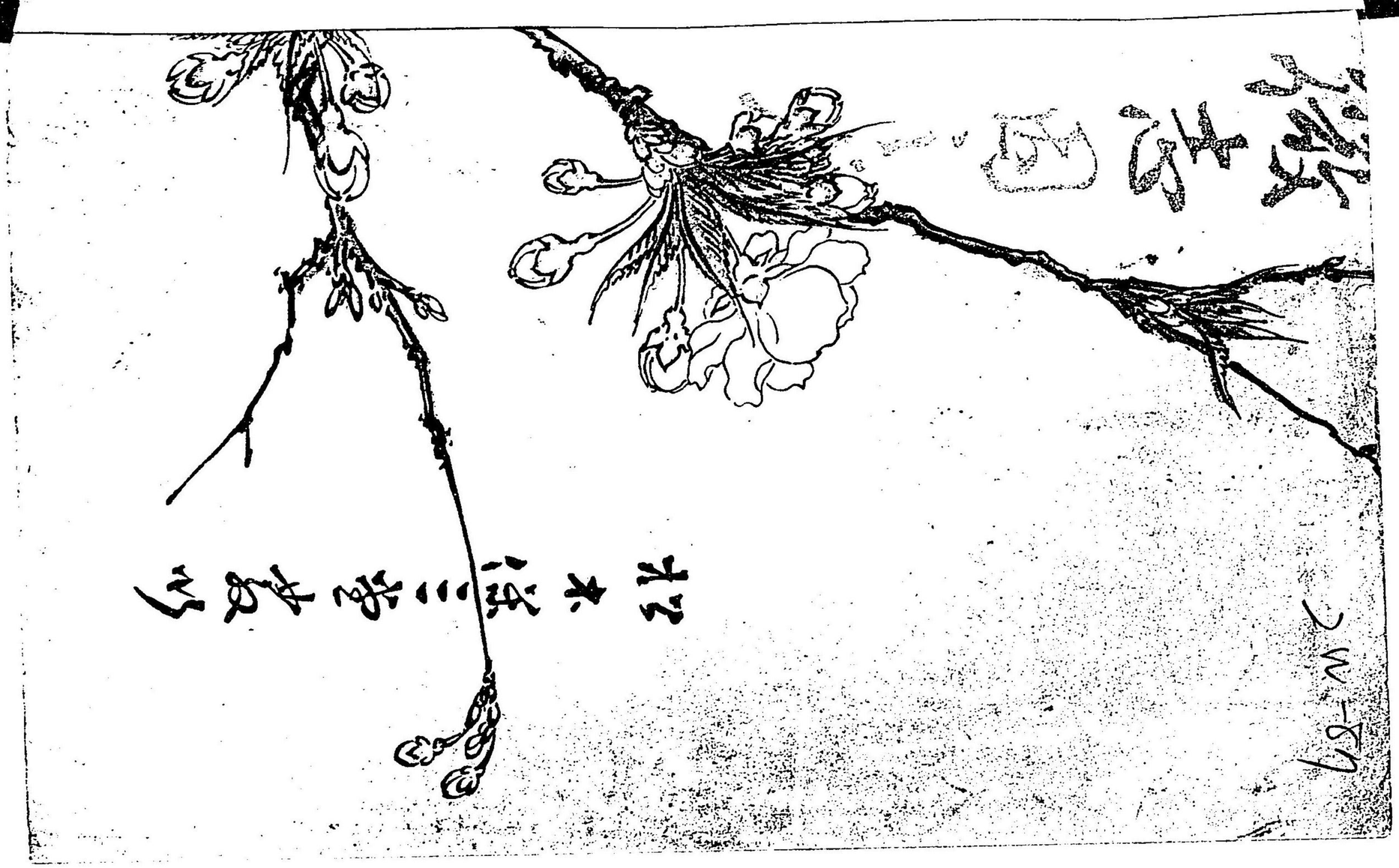
定價表	一冊	六冊	前金	郵税	廣告料
拾二冊金壹圓四拾錢	金拾貳錢	金七拾貳錢	一冊金貳錢	一頁金拾五圓 半頁金八圓 石版着色は廣告は別る印刷料申受く	

222
220

雲庵翁著

信濃歷史談

毎月壹回發行

本書は信濃國有名なる偉人傑士を撰拔し其一生の言行後人をして感憤興起せしむるに足る事ゝ言文一致に記し期を定て刊行仕るもけあを論者は永く高等師範學校に奉職し小學の教育を專攻したる人なれば其内容の教育的よりして史談の好資料さると切章今文乃模範たらしむることを得べし殊さ挿畫と有名なる畫伯探樂氏れ靈腕さおり之さ一を精好なる着色を施し紙質善良印刷明媚他に多く其備を見る若き夫れ表紙乙意匠の如きに至ては弊社獨得の精華を盡をり若し一点疑を挿む者あらば以下續き續きさ發行する所を殘らず讀んでは覽なさるべし云ム

第壹編　雷電
第貳編　象山
第參編　絲平
第四編　第一大軍神
第五編　一茶
第六編　宗伯
第七編　安正
第八編　春臺